

岩手医科大学歯学会第48回例会抄録

日時：平成11年7月3日（土）午後1時

場所：岩手医科大学歯学部第四講義室

特別講演

感染症として歯周炎を捉える

木村重信教授

岩手医科大学歯学部口腔微生物学講座

感染とは、宿主（ヒトや動物）の体表あるいは体内に微生物が新たに付着または定着し、そこで増殖をはじめの一連の過程と定義することができる。また、感染の結果生じる疾病を感染症という。言い換えれば感染症とは、宿主にとって新たな寄生状態が生じ、その結果、感染微生物の作用が原因となって宿主に生じる病気をさす。

口腔内の疾患、特に歯科の二大疾患といわれるう蝕と歯周炎もその直接的な病因は口腔内に生息する微生物であることは多くの基礎的研究、臨床的観察から明らかである。それ故にこれらの疾患は感染症の一つとして捉えることができる。しかし、結核やコレラといった感染症とはかなり趣を異にすることは容易に想像される。それは、結核やコレラといった外因感染症とは異なり、これらの疾患が口腔内常在菌による内因感染症による疾患であることによる。このことは、その発症・進行に微生物以外にも不可欠な多くの因子が存在するというを意味する。歯周炎については、その多因子性は“Host-parasite Interactions（宿主-寄生体間相互作用）”という言葉で表されている。

今回は“Host-parasite Interactions”をキーワードとして、歯肉溝/歯周ポケット内および歯肉組織内という二つの場において歯周炎の成立機序について検討し、「感染症」としての歯周炎の特異性とそれに対する宿主の免疫応答の一端を概説した。

演題1. 高校における理科履修科目および受験科目と歯学部入学後の関連科目の成績について

○市丸 俊夫, 荒木 吉馬, 桂 啓文
齊藤 設雄, 昆 隆一

岩手医科大学歯学部歯科理工学講座

目的および方法

近年の大学生は大学の授業に必要な基礎学力が不足しているといわれている。そこで、今回、本学歯学部入学生についてその実体を把握し、今後の本学歯科教育内容の改善に資するために、入学年度が平成元年から8年に渡り、入学後の理系関連科目成績に関する次の事項を経年的に調べた。1) 高校で履修しない理系科目に対する入学後の関連科目（教養理系科目、歯科理工学、6年総合成績）の成績。2) 理系受験科目別（物理、化学、生物、推薦）の入学後の関連科目成績。3) 理工学と入学後の教養理系科目および総合成績それぞれの間の相関係数。

結果および考察

1) 教養理系科目9科の成績のうち、物理a、生物a、生物bについて、高校で該当科目（物理、生物）を履修しない群が低値であった。理工学および総合成績においては、物理、化学、生物それぞれ履修-非履修群間でいずれも有意差は無かった。

2) 教養理系9科目の成績のうち、物理a、物理b、医用工学、化学a、化学b、有機化学、生物aの7科目に受験科目群間に有意差があり、受験科目との強い関連が認められた。理工学および総合成績において、いずれも受験科目群間に有意差は無かった。

3) 理工学と1年の物理（2科目平均値）、化学（同）、生物（同）の相関係数は、例外的に底値を示した平成4年度を除き、0.57から0.19の範囲にあり、いずれの科目とも経年的な推移および平均値は0.33、0.31、0.38とほぼ同様であった。2年の物理、化学、生物との経年的平均値はそれぞれ0.43、0.30、0.45であり、化学が有意に底値であった。1年理科（6科の平均値）と2年理科（3科の平均）を比較すると、両者の経年的推移